

井上清湖 著

南船北馬

南船北馬

井上清湖 著

井上 清湖 (本名憲俊)

■大正2年・大阪市生れ (本籍・兵庫県)

■昭和16年・東洋音楽学校卒業(現,東京音大)作曲を
コンスタンチン シャピロ, 柏木俊夫氏に師事■戦時中
満州(旧)で作曲家協会会員として音楽活動■昭和16~
17年・京城(ソウル)で青少年の吹奏楽指導と音楽教育
■昭和19年・関東軍に応召■昭和21年~25年・兵庫県
立高校に奉職, 傍ら地方の音楽活動■昭和25~57年・
東京, 中央学院に奉職■現在, 全日本吹奏楽指導者協
会会員■この間, 欧米および東南アジアへ外遊

■著書 歌曲集「天の原」「うつろい」「聴音の練習書」
紀行集「世界音楽の旅」その他種の作曲



〒677 兵庫県西脇市中畑町616 電話 07952(2)8007

〒335 東京連絡所 埼玉県蕨市南町4-39-11

電話 0484(41)5437

南船北馬

定価三〇〇〇円

昭和六十年三月八日 第一刷発行

著者 井上清湖

発行者 森英治

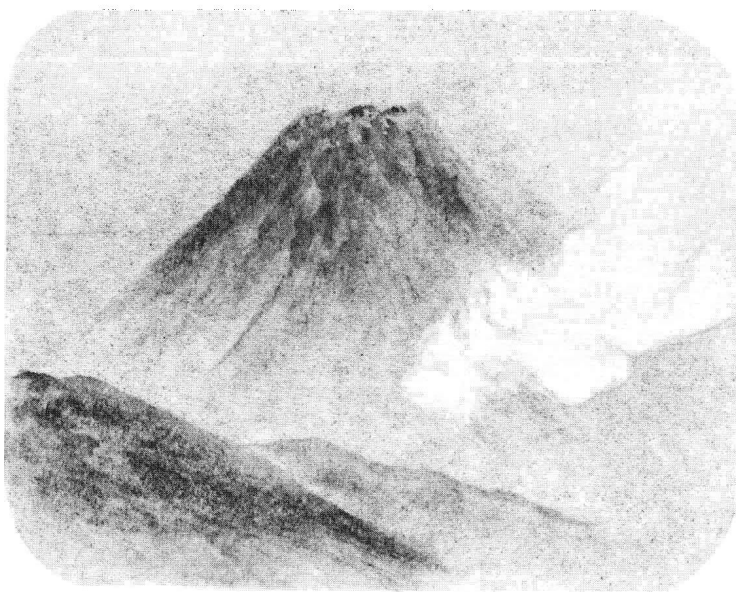
発行所 三樹堂

〒二七一 東京都豊島区要町三ノ一八

製作 株式会社西武百貨店

装幀 笹川寿一

印刷・製本 東京連合印刷(株)



「南船北馬」によせて 淵上晃成画



奉天市 郊外の農民



奉天市 市内風景



奉天市 城壁の望楼



奉天市 効外、農家の子供たち



◀奉天市 城門外のヤンチョウ引(洋車)



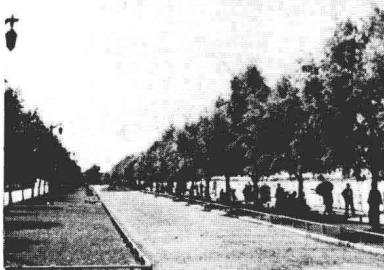
ハルビン駅



ハルビン市 南崑区にあるギリシャ
正教、中央寺院



ハルビン ロシア人街(キタイスカヤ)



ハルビン市内 旧日本人女学校附近



◀ハルビン スンガリー（松花江）と
ヨットクラブ

忠烈の勲燦々



二子をこひ結ひたる將軍の心やいかに
雲横水遠に微笑み振り給ふらん
乃木保典對戰死之所
(聖地原廟の面影)



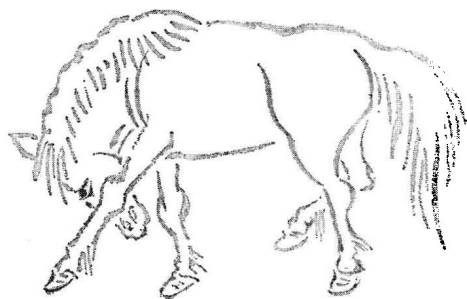
爾靈山 險阻難攀
勇士功名期克難
經血覆山 山形改
萬人仰 爾靈山
故乃木軍神の詩

に念ひい貴の軍將木乃神軍「榮華豈險山強爾」
たち路に逢も山嵐雨の落不成難
。く輝と々燦に碑念記の頂山は勲の烈忠
(影面の顯旅地聖)

日二月六年七十和昭
神可許部令河軍要原旅
日九廿月六年七十和昭
神可許部令司陸海軍駐特面方駐

大連市 表忠塔(昭和17年)

南
船
北
馬



目次

第一章 生い立ち

一、丘の上の分校	9
二、高原の小学校(一)	10
三、高原の小学校(二)	11
四、山川の自然のなかで	12
五、文明開化	14
六、学窓をあとに	15
七、父と母と	16

第二章 青年前期

一、山陰の旅……………18

二、時は流れる……………19

第三章 就 学

一、向学の道へ……………21

二、大阪での第一歩……………22

三、音楽学校……………24

四、商業学校 その他……………25

五、栄冠を手に……………27

第四章 海拔三千尺

一、高野山へ……………29

二、大学 (一)……………30

三、大学 (二)……………32

四、大学 (三)……………34

五、下山……………35

第五章 芸術家への道

- 一、上 京……………38
- 二、東京から甲州路へ……………39
- 三、音楽学校 (一)……………40
- 四、音楽学校 (二)……………42
- 五、音楽学校 (三)……………44
- 六、音楽学校 (四)……………47
- 七、弟の死……………49

第六章 朝 鮮

- 一、京城へ……………51
- 二、教師となって……………53
- 三、京城あれこれ……………55
- 四、満州旅行……………57
- 五、太平洋戦争始まる……………60

第七章 満 州

一、渡 満……………	63
二、延吉市（局子街）……………	65
三、延辺高女……………	67
四、ハルビン旅行……………	69
五、音楽活動と冬の訪れ……………	72
六、帰国、そして再び大陸へ……………	73
七、戦雲ただよう満州……………	75
八、関東州へ……………	76
九、教育と文化活動……………	79
十、陸軍病院……………	82
十一、学徒動員……………	84
十二、冬の旅（一）……………	85
十三、冬の旅（二）……………	88
十四、兵器工場……………	92

第八章 応 召

一、入 隊……………	95
二、兵士としての第一歩……………	98
三、教練の明け暮れ……………	100
四、夜間演習……………	101
五、伝染病の発生と演芸会……………	103
六、精神訓話と実弾射撃……………	105
七、教育終了……………	108
八、除隊近し……………	109

第九章 召集解除

一、除 隊……………	110
二、その後……………	111

第十章 帰 国

一、祖国へ……………	114
二、縁談、そして召集令……………	116

三、学徒と共に……………117

四、臨戦下での結婚……………119

五、沖縄の死闘と、原爆投下……………120

六、ソ連の参戦と、日本の降伏……………122

七、敗戦のあと (一)……………123

八、敗戦のあと (二)……………124

第十一章 新生活へ

一、H高女……………127

二、たずね人……………128

三、北海道の旅……………129

四、平和は来る……………132

五、転機……………134

第十二章 東京へ転任

一、故郷をあとに……………135

二、隅田川の畔りで……………137

三、フルハト会	138
四、鎌倉へ	139
五、生活と学究と	140
六、芦花公園へ	142
七、千歳鳥山へ	144
八、時は流れる	145
九、国領へ	147

第十三章 照る日くもる日

一、順風に乗って	149
二、生活と平和	150
三、暗転	151
四、埼玉へ転居	153
五、武蔵野の自然	154
六、日進月歩	154
七、ロマンの夢は果てしなく	156

終りに

その一……………158

一九六四年（昭和39）より一九六八年（昭和43）まで

その二……………161

一九六九年（昭和44）より一九七四年（昭和49）まで

その三……………163

一九七五年（昭和50）より一九七九年（昭和54）まで

その四……………166

一九八〇年（昭和55）より一九八四年（昭和59）まで

小説についての解説……………170

第一章 生い立ち

一、丘の上の分校

一九二〇（大正九）年、宗方大介は尋常小学校へ入学した。

母は入学祝に赤飯をつくってくれた。学校は村の西側、小高い丘の上にあった。登下校のために、上坂と下坂があり、大介は下坂の組だった。分校は六年制の尋常小学校で、生徒総数は八〇名くらいだった。丘の上に二棟の木造平屋建校舎が建っていて、校庭は高さ二メートル位の石垣により、上下に分れていた。

学童たちは木綿紵がすりの着物に、草履ぞうりをはいていた。新木校長はいかめしい髭を生やしていて、威厳があった。複式学級だったので、一年と二年が一つの教室のなかで学習をした。休み時間になると学童たちは、丘続きの山道へ入り、木に登ったり、斜面をすべったりして遊びに興じた。しかしこのころ、細谷川上流にあるS村の分校と合併するため、村境の高原に新校舎が建設されつ